

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

弟の健介は五月一日生まれ。私は三月二十五日生まれ。四年と六年で学年は二年違うけど、月日で計算したら、一年ちよつとだけしか違わない。私がおう少し遅く生まれてたら、五年生だったってこと。

お母さんは予定日どおりに生まれてたらよかったのに、とたまに言う。予定日は四月十日だったそう。ちなみに早紀ちゃんの誕生日も四月十日。偶然だけどなんだかうれしい。けど、実際に私が予定どおり四月十日に生まれてたら、早紀ちゃんより一学年下になるってこと。

私は架空の五年生、四月十日生まれの綿貫真美を想像する。その子はきつと早紀ちゃんみたいに明るくて、ダリア（花の名前）みたいに笑う、クラスで人気者の女の子だ。自分の意見をはきはきと言って、弱いものいじめは許さなくて、いつだって正々堂々としてる。勉強ができてスポーツもできて、先生からの信頼もアツい。家族からも愛されてて、いつだって笑顔の女の子。

私は架空の綿貫真美をうらやましく思う。いいなあ、そういう子になったかかったなあ。なんで予定日まで、お母さんのお腹のなかにいなかったのかな。①だって早生まれは損だと思う。保育園ではいちばん身体が小さくて、やること全部がとろくて、みんなと同じことができてなくて、いつもあせっていたしおもしろくなかった。そしてそれは、六年生になった今でも変わらない。

早紀ちゃんや健介みたいになれたかったな、と時々思う。ダリアみたいに笑える子に。

会社の人が見ててね、ほめられちゃった。いいお子さんでうらやましいって。彼女のところ、中学生の男の子がいるんだけど、不登校っていうか、引きこもりっていうの？　なんだか大変みたいなの。うちはよかったわ、ホントに。運動させなきゃダメよね、男の子は。

タウントップックス（地域の情報誌の名）の話だ。みんな意外と見てる。意外と気にしてる。

私は、いつもよりも早く仕事から帰ってきたお母さんと一緒に、餃子を作っている。

「たくさん作って冷凍しておくわ。私が遅いときは、これを焼いてちょうだい」

「うん」

「健介は最近よく食べるから、これでも足りないかもね」

そう言ってお母さんはうれしそうに笑った。私も一緒に笑う。だって本当に最近の健介の食欲はすごいから。

「今日はちよつと鼻が高かったわよ」

お母さんの機嫌がいい。ふふんと鼻歌まじり。健介のことをほめられて、②シンキのお客さんに契約を約束してもらったのだそう。お母さんは生命ホケンの外交員だ。

「クラスの子にも健介のこと言われたよ。かわいい弟だね、だって」

あらそう？　お母さんがまんざらでもなさそうな顔をする。

「四年生でピッチャーなんてすごいって」

「あらまあ。すっかり有名人ね、健介は」

餃子の皮に水をつけて、くつくと閉じる。私も同じように水をつけて包むけど、お母さんみたいに、手早く上手にできない。よしよ、よいしょって感じ。

「健介がいるから鼻が高いよ」

③と言ってみる。もちろん本心で。だけど言ったそばから、心にざらつとしたものが残るのはなぜだろう。お母さんは「そうね」と言つて、うれしそうな顔をした。また少し心がざらつとした。

『編みもの大会優勝、綿貫真美さん最年少十一歳』

「第一回編みもの大会で、最年少十一歳の綿貫真美さんが優勝しました。今回はかぎ針編み限定。作品はあみぐるみのダリア。あみぐるみならではの温かいぬくもりを感じさせる作品。大きな口をあけて、たのしそうに笑っているダリアが審査員の心をつかみ

ました」

タウントップックスの記事。健介の次は、私が写真入りで記事になった。
なーんちゃって。

これは四月十日生まれの架空の綿貫真美の話。現実の三月二十五日生まれの綿貫真美は、お母さんに頼まれて、アクリル毛糸のスポンジを作っている最中。

ふうつ、一個出来上がり。少し休憩。健介はまだ帰ってきてない。お母さんは買物に出かけた。

出来上がったアクリル毛糸スポンジを掲げてみる。けっこうかわいい。近頃では図案を見なくても新しい形を作れるようになった。今作ったのは、花のかたちにしてみた。お母さんは凝らなくていいって言うけど、ただの四角や丸じゃつまらないし、色だつて二色以上は使いたい。

④編みものを教えてくれたおばあちゃんは、おとし死んでしまった。おばあちゃんだけは、いつでも私を「いちばん」だって言ってくれた。

真美ちゃんはほんとうにいい子だねえ。なんでもいちばん。いっとうしよう。

そう言つて、膝に抱えていつも頭をやさしくなでてくれた。おばあちゃんに会いたいな。ちよつとだけセンチな
(物事に感じやすく) 気分になつてしまう。
(なみだもろい様子)

最近のお母さんの機嫌が悪いのは、私のせいかもしれないって少し思つて。五年生のときのセイセキも良くなかつたし、夏休み明けの家庭ホウモン⁵では先生に「もつと積極的」に「もつと明るく」「もつと自信をもつて」などと、「もつと」の連発をされ、それを私に伝えるお母さんの言葉のはしりには、しょうがない子ねえ、という言葉が含まれてるような気がした。

健介はあんなに元気なのに。健介はあんなにスポーツが得意なのに。健介は学級委員をやっているのに。健介はきはきと明るいのに。健介は勉強ができるのに。健介は絵が上手なのに。

それなのに、姉の私ときたら。てんでだめ。勉強もスポーツも音楽も図工も、なにをとつたつてふつう以下。編みものが得意だ

からつて、そんなのなんの自慢にもならない。

健介は餃子を二十七個食べた。すごい食欲だ。お母さんは慌てて冷凍にしようと思つた分から十五個ほど取り出した。餃子はどうとおいしくて、私もはりきつて八個食べた。だつてお母さんの作る餃子って中身がぎゅうつと詰まつて、けっこう食べである。それなのに健介、二十七個だなんて。来年はきつと、私の背を越すだろうな。

今日はお父さんも早めに帰つてきて、私と健介がリビングでテレビを見ている間に、夕食を食べていた。

「お母さんの作る餃子は世界一だよな」

なんて言うから、健介と顔を見合わせた。まったく調子がいいんだから、とお母さんも呆れ顔だつたけど、どことなくうれしうだった。お父さんも健介に負けじと二十個の餃子を平らげた。こうしてみんなが仲良しなのはうれしい。毎日こういうのがい。心があつたかくなる。

私やつぱり新しい家なんていらなし、お母さんにも前みたいにパートに戻つてほしいな。それで、毎日おいしい夕飯を作つてほしい。

「これ、できたよ」

アクリル毛糸スポンジを部屋から持つてきて、お母さんに渡した。

「あらあ、かわいいわね。ありがとう」

お母さんは言つて、それを見たお父さんは手にとつて、「使うのもったいないな」と言つた。ちよつとだけ誇らしかつたし、うれしかつた。

⑥「カントンだから、もつと作つておくれ」

そう言つと、お母さんは「お願いね」と私にウインクしてみせ、お父さんは「おこづかい増やさないとなあ」と笑つた。

⑤雲行きがあやしくなつてきたのは、私がお風呂からあがつて、部屋で宿題を片付けていたときだった。ドアが開け放してあるせ

いか、お父さんとお母さんの声がよく聞こえた。

「なんで、あなたのところに連絡がいくのよ！」

「なんでって、チョコセツ断りにくかったからだろう。向こうだって気をつかっているんだよ。あんまり知り合いに頼るのはよ

よ」

ドンッ

机を叩く音。

「なにするんだ」

お父さんのびつくりしたような声。

話の内容は、どうやら今日のお母さんの契約のことみたいだ。契約を確約した人から、お父さんに断りの連絡が入ったらしいのだ。

「私、知り合いとかそういうつもりじゃなくて、本当にいいショウヒンだから勧めたのよ。電話かけたら、ぜひ来て下さいって言うから行ったんじゃない！ 無理やりじゃないわよ。なんでそんな言い方するのよ。それに青木さんも青木さんよ。なによ今さら。私、電話かけてみるわ」

よせて、いいかげんにしろよ。みんな迷惑してるのがわからないのか。

「みんなって誰よ！ 第一なにさ。仕事して帰ってくるのはあなたと同じじゃない。それなのに私はご飯作って、掃除洗濯して。あなたなんてそうやって勝手なこと言うだけじゃない」

ドンッ

机を叩く音。思わず耳をふさぐ。

ドンッドンッ

「いいかげんにしないか。お隣に迷惑だろ」

「だから一軒家を買うために働いてるんじゃない！ 文句あるなら私が働かなくてもいいくらいに稼いできなさいよ」

「なんつ……」

健介が足音を忍ばせて部屋に入ってきた。ちょうどお風呂からあがったところだ。

「なんかいきなりすごいテンカイになってんですけど？ なに、あの母ちゃんのすげえ声。みつともないなあ。俺、もう寝るわ」
そう言って、健介が二段ベッドの上にあがった。リビングからはまだ言い争いが聞こえる。

「中略」

「うるさいっ」

すごく大きなお父さんの声に、思わずびくつと肩が持ち上がった。

ドンッ

「なによなによ、なによお！」

お母さんの声もひとときわ響く。もうやめて。ケンカしないで。

「いいかげんにしないか」

ガッチャーンとなにかが割れる音がした。耳をふさぐ。もうやめてやめて。

「お前がそういうことをするから、真美があんななんだ」

え？

今、真美って言った？ お父さんの声その部分だけ際立って私の耳にトドク。

「お前がいつもガミガミ言つて、大きな声や音を出すから真美がおびえるんだ。見てみる、いつだっておどおどして、俺たちの顔色をうかがってるじゃないか。さつきだつてそうだ。せつかく作ってくれた毛糸だつて、もつとほめてやれよ。ビクビクしながら

お前に渡してきたじゃないか」

⑥ 冷たいかき氷を急に食べたときみたいに、耳から頬にかけてきゅうつとしぼんでいった。

そのあと、思いきり背中を押されて転ばされたように、膝がぐんとした。身体中の力がまったく入らなかった。

「私のせいじゃないわよ！ あなたが調子づいて健介をタウンントピックスに載せてもいいなんて言うからいけないのよ」

教科書の文字が見えなくなった。ノートに涙がばたばたと落ちた。私のせいだ。全部私のせい。口をふさいで、ひつくひつくという鳴咽をこらえる。けれど涙はちつとも止まらなかった。ぬぐってもぬぐってもじゅんじゅんあふれてきて、鼻水までたくさん出てきた。

A
ふーんと鼻をかんたら、その音でまた悲しくなった。

全部私のせいだ。お父さんとお母さんがケンカするのも、お母さんが機嫌悪いのも。全部全部私のせいなんだ。

「前はすごく明るい子だったのに、お前がしょっちゅう怒鳴ってばかりいるから萎縮してしまっただ。真美の気持ちも少しは考えてやってくれ。母親が毎日イライラしたら、子どもに良くないに決まってるだろう。余裕がないなら仕事なんてやめたほうがいい。家なんて買わなくなつて、このままで充分だ」

お父さんの怒りを含んだ抑えた声のあと、お母さんのすすり泣く声が聞こえた。算数のノートは涙で濡れて、書こうと思つてもノートがふやけて字が書けなかった。私は濡れたページを破つてゴミ箱に捨てた。

ベッドに入つて目をつぶつたけど、涙はまぶたをこじ開けてすき間からどんどん流れた。枕が涙で濡れて、冷たかった。

「中略」

「あれ？ 綿貫さん、目がいつもとちよつと違うみたい」

⑦ やつぱり言われた。早紀ちゃんは今本当にみんなのことよく見てるんだ。でも今は三時間目の家庭科の授業。三時間目のこの時間まで、他の誰も私の目なんて見てなかったこと。それが、気付いても言ってくれる子は誰もいなかったこと。

早紀ちゃんとはハンが一緒に、今はエプロン作製中。ミシンの下糸が終わってしまったので、ボビンケースを取り出して糸を巻

きつける作業を一緒にやっていたところだった。

「寝不足？ 寝すぎ？ それとも泣きすぎ？」

早紀ちゃんが笑顔で聞いてくる。昨夜お父さんとお母さんがケンカして、そのケンカの原因が私かもしれない、それが悲しくて泣きながら寝た、なんて理由、言えるわけない。私は、てへへと笑つてごまかす。

こういうとき早紀ちゃんは、苦手な女子みたいにしつこく聞いてこない。私を励ますような笑顔をしてみせるだけ。ダリアが咲き誇る前のつぼみみたいな笑顔で。

「エプロン作りなんてオワッテない？ だって今どきエプロンしてる人なんて見たことないよ。綿貫さんちのお母さんは、エプロンしてる？」

早紀ちゃんが聞いてくる。私は、ううんと首を振る。エプロン12sgataのお母さんなんて、そういえばしばらく見たことない。ずうっと前、私が保育園のとき、猫のアップリケがついたエプロンをしてた気がするけど、記憶が定かではない。友達のお母さんだったかもしれないし、親戚のおねえちゃんだったかもしれない。ただ、ポケットについてたアップリケがかわいくて覚えてるっただけ。

最近はお父さんとケンカばかりのお母さん。たまには、エプロンしてるところ見てみたいな。

「だよな？ 他の課題がよかったな。もつと実用的なもの。手提げ袋とか、編みものでセーターとかさ」

早紀ちゃんがそんなことを言うから、「私、編みもの得意なんだ」とつい言ってしまった。言つてから、言わなければよかったと後悔した。だって早紀ちゃんとはそんなに仲いいってわけじゃないし、それに得意だなんて、なんか自慢っぽい。

それなのに早紀ちゃんは「えー、そうなの！ 今度教えて」と、目を「a」輝かせて言ってくれた。

「お兄ちゃんの誕生日が十二月なんだ。うちのお兄ちゃんつて超ダサイから、ちよつとおしゃれなマフラーとかをプレゼントしたいの。自分で編めたらすつこくたのしいし、お兄ちゃんも喜ぶと思うし。それに毛糸ならお母さんが買ってくれそうだし。今からなら間に合うかな」

あと三ヶ月もある。ぜんぜん大丈夫。間に合うよ。と答えると、

「絶対教えてね、約束だよ」

と腕を取って、ぶんぶん振られた。早紀ちゃんの大きな声に、何人かの女子がこつちを見た。ちよつと恥ずかしかったけどうれしかった。

放課後、帰り際にまた早紀ちゃんに「編みものの約束、絶対ね！」と笑顔で言われた。うん、と返事をする、と、早紀ちゃんが小指をさし出してきて、二人で指きりげんまんをした。指きりなんて本当に久しぶりで、しかも相手が早紀ちゃんだから、

「b」。

今日は一日中まぶたが重かったけど、いいことがあった日だった。早紀ちゃんとたくさん話せてうれしかったし、編みものを教えてあげる約束もできた。

それになにより！

手提げカバンのなかに入っている二冊のノート。資源ゴミに出しておいて、とお母さんに頼まれた紙類の束のなかから抜け落ちた『育児日記』二冊が、手提げカバンのなかにこっそり入ってる。

気にしないようにと忘れたふりをしてたけど、実は朝からずつと気になっていた。早く家に帰って、ゆつくりと見たい。私が生まれたときの、お母さんの育児日記。

一体どんなことが書いてあるの？

私が生まれたとき、お母さんはどんなことを思ってたの？

期待と不安でいっぱいだった。なんだか見るのがもったいないような気もして、それでいて早く見たくて、でもやっぱり不安で。いろんな思いが胸に押し寄せてくる。

少しでも時間を稼ごうとちよつと遠回りしたけど、いつのまにか汗をかきながらダッシュしてる自分がいて、ばっかみたい、とおかしくなった。

――

――

たぶんまだ誰も帰ってきてない。私はカギを差し込み、少しばかり緊張して家に入った。「ただいま」と、いつものように自分と家に向かって言う。ランドセルをおろして、手を洗ってうがいして、自分の部屋へ入った。健介はリトルリーグの練習だからまだしばらくは帰ってこない。お母さんの帰りも、どんなに早くたって五時半過ぎだ。

椅子に座って、手提げカバンから二冊のノートを取り出し、机の上に置いた。

大きく深呼吸する。胸が高鳴る。そつとページをめくる。朝、ざつと見た『わたしの育児日記 前期』のページ目をゆつくりと眺める。

おなまえー綿貫真美（わたぬきまみ）

私の名前だ。十一年前、はじめて「私」という人間についた、私だけの名前。胸にじわじわつと感動の波が広がってゆく。私の名前。真新しい私の名前だ。

その次にお父さんとお母さんの名前、二十代だったお母さん。なんとなく今の私と年がちよつとだけ近いような気がして、親しみを覚える。

身長48センチ。胸囲29センチ、頭囲32センチ。あまりにもちっちゃくて想像ができない。私の今の身長は142センチだ。30センチものさしを取り出して、測ってみる。

「ひゃー、ちいさーい。なにこれ。前にデイズニールランドで買ったチップとデールのぬいぐるみくらいじゃない？」

本棚の上に並べて置いてあるチップ（デールは健介のものだ）を手取る。このくらい？へえー、つと思わず声が出る。

中橋産科・婦人科クリニクって、確か川の向こうの病院だ。次の項目は、生まれた日のお天気。快晴と記してある。

快晴。

それを見たら、急に鼻の奥がつんとした。そこに書いてある「快晴」という言葉に、その天気に、なんだかやけに感動してし

まった。だって快晴だよ。快晴だなんて！ 春になりたての一生懸命な空を想像する。晴れわたっている空の日に、私は生まれただ。

その下に「名前の由来」とあって、「真の心が美しい子に育つように名づけました」と書かれている。そういえば今まで、どういう理由で「真美」という名前になったのなんて考えたこともなかったし、聞いたこともなかった。

真の心が美しい子に育つように。

こんなすばらしい意味があつたなんて。鼻をちんとかんで、ぱらぱらとページをめくった。

前期のピンク色のノートは、最後の日付が9月25日で終わっている。半年間つてことだ。後期は9月26日から3月25日の一歳の誕生日まで。粉ミルクの会社からもらったノートらしく、うしろのほうにはセンデン用のいろんな赤ちゃんフードが掲載されている。

日ごとに、タテに24時間の数字が書いてあって、その横に、尿・便・睡眠・その他という項目がある。その他のところには、ミルクや母乳や食べ物ことや、外出したことなどが書いてある。その下にはマスがあつて、そこに今日の出来事を書くようになっている。

はふーっ、ふうーっ

再度大きく深呼吸。ページをめくった。

平成9年3月25日（火）

時間軸、深夜1時10分、陣痛（出産時に起こる腹痛）開始。間隔が徐々に狭まっていつて、そして17時16分のところに、お誕生！ と記されていた。その日の時間軸にはそれだけしか書いてない。

その日の日記はこうだ。

「はじめての出産。陣痛はとても痛くて分娩（子どもを産むこと）もパニック状態だったけど、無事に生まれてくれて本当に良かった！ あ

りがとう真美ちゃん！

予定日より半月も早かったからどうなることかと思つたけど、2420グラムありました。早く会いたかったから、うれしいです。真美もママに早く会いたかったんだよね？ だから早く生まれてくれたんだよね！

性別はたぶん女の子、と言われていたとおりに女の子でした。女の子が欲しかったからうれしい！ 生まれたてのくしゃくしゃの真美の顔を見たら、涙が自然とぼろぼろとこぼれました。本当に生まれてきてくれてありがとう。私のところに来てくれてありがとう！ 神様に心から感謝します」

「中略」

読むたびに胸が熱くなつて鼓動が早くなつて、ほとんど泣きそうだった。温かな安心と幸せが日記から充分に伝わってくる。生まれたての私と、ママになりたてのお母さん。

カギが開く音。時計は六時十分だ。

「ただいま」

お母さんのご帰館。

「おかえりなさい」

少しだけ緊張する。心臓が少しだけどきどきする。お母さんはいつもの疲れきった顔。機嫌がいいのか悪いのか、うまく読み取れない。私は十一年前のお母さんに、心のなかでお礼を言う。

「健介はまだ？」

「うん、まだ。試合が近いからちよつと遅くなると思うよ」

そう、と言つて、お母さんは私の頭に手を置いて髪を触った。去年までは伸ばしてたけど、六年になってから、正確に言うとお母さんが働き始めてから、髪を短く切った。それまでは、お母さんが三つ編みにしてくれたり、編み込みにしてくれたり、お団子

にしてくれたりしてただけど、ツトめ出してからは朝が超忙しくて、それどころではなくなっていました。自分だとなかなか上手く結べなくて、学校に着く頃には不恰好になってしまいうから、思い切って切ってしまったのだった。

⑧「髪伸ばしたい？」

頭のなかで考えていたことを聞かれて、思わずどきとする。

「ううん。短いほうが楽なんだよ」

そっか、とお母さんは言つて「短いのも似合うよ」と言ってくれた。なんだか、あんまり元気がないみたい。

「お風呂洗つておいたよ。お米も研いでおいた」

そう言つと、目をちよつと大きくして「ありがとうね」と言われた。

「真美がいるから本当に助かるわ。いつもありがとう。なんだかお母さん、ちよつと頭が痛いから、少し横になるわ」
そう言われてみると、確かに顔色が悪い。

「大丈夫？ 買物行つてこようか」

スウェットに着替えているお母さんにたずねる。

「ああ、そうね。冷蔵庫からつばだわ。じゃあ悪いけど、なにか夕飯のお惣菜買つてきてくれる？ なんでもいいわ、適当に。そのお財布持つてつて」

「風邪薬とかも買つてこようか？ 頭痛薬とか」

お母さんは首を振つて、大丈夫、ただの寝不足だと思うから。少し横になったらすぐ良くなるわよ、と言つてうすく笑つた。

私は押し入れから布団を出して、和室に敷いてあげた。お母さんはまた私の髪に触り、

「本当にありがとうね。助かるわ」と言つてから、横になった。

昨日あのと、眠れなかつたんだなと思つた。それつて私のせいだ。昨夜のことを思い出すと、心がぎゅうつとしぼんでいくようだったけど、私は頭をぶるんと振つて、その感情を振り飛ばした。

健介が七時過ぎに帰つてきて、そのあとすぐにお母さんが起きた。

「大丈夫？ お母さん」

髪が乱れているせいか、普段より老けて見える。⑨四十一歳のお母さん。二十九歳のときから、時間がたくさん経つたんだ。なんだか不思議な気持ちだった。

⑩日記を読む前と今とは、自分の心の鮮度がぜんぜん違うように感じる。ぴきん、と新しくなったような気さえする。

「大丈夫よ。寝たら元気になったわ。ありがとうね、真美」

用事があつたらなんでも言つてね、と言つと、お母さんはやさしく微笑んだ。

(椰月美智子「ダリアの笑顔」)

問1 —— 線部1～15のカタカナの部分の漢字で書きなさい。

問2 —— 線部①「だって早生まれは損だと思う」(2ページ)とありますが、この気持ちはあることばに会うことで変化します。そのことばを二十字以内の一文で抜き出さない。

問3 —— 線部②「まんざらでもなさそうな」(3ページ)とありますが、「まんざらでもない」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 何となく疑わしい イ ちよつとてれくさい ウ 心から幸せだ
エ それほといやでもない オ まったく予想通りだ

問4 —— 線部③「心にざらつとしたものが残る」(3ページ)とありますが、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問5 — 線部④「編みものを教えてくれたおばあちゃんは、おとし死んでしまった」(4ページ)とありますが、真美のおばあちゃんへの思いを述べたものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア「私」が得意としている編み物を教えてくれて、家族の中で一人だけ親切にしてくれたおばあちゃんに改めて感謝している。
イ最近の機嫌の悪いお母さんよりも、いつも「私」にやさしいことばをかけてくれたおばあちゃんに親近感をいだいている。
ウ「私」の得意な編み物を教えてくれ、ただ一人やさしく「私」をほめてくれたおばあちゃんを思い出して寂しく思っている。
エいつも「私」を認めてくれたおばあちゃんが死んでしまっただけで、何をやってもめでためでたしで申しわけなく思っている。
オ おばあちゃんがせつなく編み物を教えてくれたが、いまの「私」にはなんの自慢にもならなくてとても残念に思っている。

問6 — 線部⑤「雲行きがあやしくなってきた」(5ページ)とありますが、どういうことですか。具体的に二十字以内で説明しなさい。

問7 — 線部⑥「冷たいかき氷を急に食べたときみたいに、耳から頬にかけてきゅうつとしぼんでいった」(7ページ)とありますが、これはどのような気持ちを表していますか。八十字以内で説明しなさい。

問8 ……線部A「ぶーんと鼻をかんだら」(8ページ)と、……線部B「鼻をちんとかんで」(12ページ)とありますが、この二つの表現からうかがえる気持ちの違いを四十字以内で説明しなさい。ただし解答する際にはA・Bという記号を使って説明しなくてもかまいません。

問9 お父さんについて説明したものとして、適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 今の家が気に入っているの、新しい家を買うことには反対している。
イ 相手を喜ばせようと調子のいいおせじを言っ、みんなにあきれられている。
ウ 家族のそれぞれのよいところをほめて、場を和ませようとしている。
エ 怒鳴ってばかりいるお母さんの扱いに困り、いつもイライラしている。
オ 近ごろの真美の様子を心配し、元氣を取りもどしてもらいたいと思っっている。
カ 家事を任せつきりにしておきながら、お母さんに文句ばかり言っっている。

問10 — 線部⑦「やつぱり言われた」(8ページ)とありますが、真美がそう思っしたのはなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いつもみんなのことをよく見ている早紀ちゃんなら、自信がなくて目立たない「私」のことも気にかけてくれるだろうと思っうと思っっていたから。
イ いつもみんなのことをよく見ている早紀ちゃんには、いずれはわかってしまうことなので、隠しとおすことはできないと思っっていたから。
ウ いつもみんなのことをよく見ている早紀ちゃんに昨晚泣いたことがわかった、ほかのみんなにも伝わってしまうだろうと思っっていたから。
エ いつもみんなのことをよく見ている早紀ちゃんなら、ほかの子たちには言えない悩みも真剣に聞いてくれるだろうと思っっていたから。
オ いつもみんなのことをよく見ている早紀ちゃんには、「私」のだめなところまですべて知られてしまっっているのではないかと思っっていたから。

問11 「a」(9ページ)に入るものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ぴかぴかと

イ ばちばちと

ウ らんらんと

エ きよろきよると

オ くりくりと

問12 「b」(10ページ)に入るものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ちよつとうつとうしかつた

イ なんだかくすぐつたかつた

ウ すこしほろにがかつた

エ なんとなくなつかしかつた

オ とてもまぶしかつた

問13 —線部⑧「髪伸ばしたい？」(14ページ)とありますが、この時のお母さんの気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問14 —線部⑨「四十一歳のお母さん」(15ページ)とありますが、この表現からは真美のどのような気持ちが読みとれますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長い間育ててくれたお母さんへのいたわり。

イ お母さんの機嫌がなおったことに対する安心。

ウ 実際より老けて見えるお母さんへのとまどい。

エ いつの間にか弱くなっていたお母さんへの同情。

オ お母さんは重病なのではないかというおそれ。

問15 —線部⑩「日記を読む前と今とでは、自分の心の鮮度がぜんぜん違うように感じる」(15ページ)とありますが、どのよう

うに違うのですか。八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。

受 験 番 号

語	玉
---	---

◇K6(177—1)